



温故日録卷第九

長月

御燈 三日 三月のとき北奉の灯とせしむる事也 公  
幸根源 年中行事哥合よ

たひけする星のひり母まうふる奉よめたる秋の火  
とよ免り連歌よひひおりせめくき事り

野宮別

源氏繁木 卷よ九月  
七日むくりあはれごあり

網代打

新式よあると藻塩草よ九月九日代前よ打  
初て宇治代網代人供御よまらとりや又あ

しろハ宇治よかきうす田上よめり云云内膳司  
式云山城國近江國氷魚網代各下處其氷魚

九月ニ至ニ十二月ニ三十日ニ供ケ之ヲ今業近江國田上ノ網代ノ氷魚ヲ山城ノ宇治ノ...

重陽宴

菊花宴 菊盃 重陽ノハ九トハ陽ノ...

月九日ハ節日トしては菊ノ花ノ宴ヲ行ハルニ是ト重陽ノ宴トすル九月九日ハ月ト日ト同シ九陽ト也...

謂ク汝南桓景九月九日汝家有灾...

囊盛茱萸係臂上登高飲菊花酒此禍乃消...

此ノ酒...家中此ノ雞犬羊...死...

雙酒

重陽宴...一条冬良公此酒説...

菊

寛平菊合...以後名物...誠...

し著綿

源氏幻...卷...九月...成...

菊...花...霜...と...花...色...

源はゆりふ也云云一条冬良公此傳説は菊より云々  
すふ事ふつれ此より云々云々云々云々云々云々  
と云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々  
をあれどとして八月より綿と云々云々云々  
は似てく當日よ云々云々云々云々  
説也云云是は不足信用物也

幸連哥は嫌ぬかり  
他准之 五言抄  
淵 水邊也 流布拾遺  
集元輔哥

我宿は菊の露ははれぬとて淵と云々云々  
仙宮乃菊の露ははれぬとて淵と云々云々  
真儀抄 是は南陽此麗縣と云々云々  
羨也其山此との菊水あれぬとて淵と云々云々  
朗詠又は谷水洗花汲下流而得上壽  
者三十餘家とあるも是也其古事れんと云々

宿は菊の露ははれぬとて淵と云々云々  
のこし淵と云々云々也此哥より云々  
淵と云々云々と哥連哥より云々云々

殘菊 九月十日より残菊れん秋  
也 流布 哥此題よハ冬よもあせり

例幣 十一日一日より参内せしは大神事ある也  
人參内せしは大神事ある也 例幣とは

伊勢太神宮へ御幣を奉りせ給ふ毎辛代事  
をさしよて例幣こハヤ也昔神祇官へ行幸か  
つて御幣と請りていつ使の王御馬院事な  
常代奉幣乃と云々此事朱萑院の御時より  
一多しれ今神風伊勢乃國は御鎮坐あり  
事と思ふ也 垂仁天皇二十五年三月は

外宮ハ内宮鎮座此後四百八十四年と云く雄略天皇此御宇に御幣を奉りて官幣を奉りて公事根源  
九月十一日よちりて御幣を奉りて公事根源  
長月やとて御幣を奉りて公事根源  
年中行事 哥合あり拾遺愚草負外上よ  
えとくく此のやいす此の御幣を奉りて公事根源  
をくくあり是を連哥よはけふまかりあり

住吉市

十三日 拾玉集第三 慈鎮 哥よ  
あつ月八月のあつは住吉にありし人々をさうりたり

後名月

二夜の月後の今夜の月  
あつくもこれ十三夜のこと

桂川御禊

西川乃御禊也源氏禰乃巻よ九月十六日よ丹波宮乃西川乃御禊一の御禊

奉也懼乃巻よ中臣御禰と奉り事ありあり

明星抄よこころり野宮御禊と云言抄よあり

是秋拾友抄よハ丹波宮御禊日とあり可尋

撰虫

是ハあつら式あり事よハあつは殿上乃道邊にて殿上人よあつら

よえひて奉り是ハ堀河院乃御時よりあり  
おわよと松虫鈴虫あり誰人も内裏よあり又賀

茂社司を御らしてよめれきとをん  
公事根源 年中行事 哥合よ

いろくろくあつら御幣のあつら人の衣より衣きてそとるをん

露霜

露時雨 此ハ二色けりてハ秋也けりかぎり  
乃月よじよひてハ秋也露をむむひてハ初霜と

り秋也露霜乃さひれたるけり秋なり  
但露乃早ありとて君吹の字ありハ冬なり

霰こ雨り よ冷ひきこじ

すじくの秋也

時雨ときり よ霧きりをこいつき秋の道

具もひもひて秋の流布

霧きり よ霜しもをひもひて

も秋也 流布

露寒つゆさむ 將寒まささむ 眈寒とんさむ 兩説りゆうせつ 可か用よう

也 孟津抄

平花抄同

漸寒ぜんさむ

秋あき

八月九月はつげつちち新式抄しんしきしょう 源氏桐げんじとうはは

野分のわけだだららててかかららななるるももししいいよよ云い野分のわけ八月の物もの

夜寒よさむ

秋也あき夜よととささむむことことりりとと入いてい

冬也ふゆ又また寒さむ起おこるるののささむむ皆みな冬也

朝寒あささむ

秋也 流布

ああままけけととししりり今いま

鶏皮けいひ

身み此こ毛もづづ事こと新式抄しんしきしょう

春はるのの言ことばややちちりりをを我われららささむむににああけけははるるるる

正月しょうげつのの雨あめははああるる若わか菜な下くだよよもも冬ふゆのの雨あめははああるるととりり春

秋あき冬ふゆ共ともよよ云い詞ことばとと入いるるもも連つら哥うたはは秋あきとと昌

程ほどののつつりり霜しも寒さむ惡わる寒さむととりり

琴ことのの音ねれれととららむむじじとと夕ゆふととれれけけももおおよよははららぬぬままららむむはは

堀ほり川がわ次つぎ郎らう百ひゃく首しゅ俊しゅん頼たの哥うたととららむむらら五ご音ね相あ通とぬぬるる

依よ物もの不ふ可か為な秋あき之の由よし雖な在あ儀ぎ秋あき之の季き大おほ切き之の時とき強

冷ひや用もち之の事こと有あ例れい新式しんしき相あららむむとと云い事ことあり

そそのの非ひ秋あきととりり不ふ審しん也

乳鳥鴨にちとう

ホホもも冷ひやととりり詞ことばひひ

ひひととりり秋あき也 孟言抄もうげんしょう 漸寒ぜんさむ夜よ多おほむむひひややらら力ちからああむむをを

ののととりり衆しゆととららむむ同どう前ぜん涼すずとと暑あつれれ詞ことばをを添そせせるる夏なつ也

長夜ながよ 八月はつげつ九月くげつ正ただ長なが夜よ千ち聲こゑ万ま聲こゑ

無な了り時とき 白氏文集はくしぶんしゅう 題たい夜よ砧あし詩し

冬边

待冬

秋邊而

秋盡

秋盡 秋もついでても秋もついでても猶さじさ  
松風もついでても同前秋もついでても

准之流布 四季ともふれぬ  
四季ともふれぬ

山、色野、色

植物、嫌、打、越、但、依、句、魁、也、新、式、句、魁

と植物よ下嫌野山れ色はゆゆ新をれはもとより  
と植物よ下嫌野山れ色はゆゆ新をれはもとより

野山、錦

野山、紅

山もよぬあふ嵐か 紹巴  
と云句は類秋たり

時雨、深山

夕空も山や下よの物 宗祇  
くは折句句を引よ留らるもも發句乃

一筆 ちりちりちりちり  
ちりちりちりちりちりちり

枯野、露

秋也新式枯野れ露氷と

枯野

虫

色このふ字わかれはるの物もはむじもい  
てハ秋也勢をじもひてハ秋也 流布

裏樹

園野邊原庭かその文字は入る也

草樹

草はこころハ冬也花をといはむじもハ秋也わく菊  
は色たもてハ秋也名草れわくハ冬をれも花を  
といはむの字くはてハ秋也 流布





秋の物... 右尾花... 龍膽の花... 秋の物... 流布

我毛香

秋の物... 我毛香... 秋の物... 流布

晚稻

晚稻... 室に晚田... 秋の物... 流布

糲

糲... 唐韻云糲... 後漢書... 糲讀於路... 於北俗... 比豆知自生... 糲也... 堀河次郎百首... 糲と用たり

或ハ糲

霜

霜... 秋也... 流布

草駟

草駟... 夫木... 草駟... 秋の物... 流布

紅葉

紅葉... 時雨霜... 紅葉... 秋也... 流布

入てハ... 秋也... 流布

紅葉... 秋也... 流布

紅葉... 秋也... 流布

紅葉... 秋也... 流布

紅葉... 秋也... 流布

水

水... 秋也... 流布

色... 露... 秋也... 流布

てハ秋也... 流布

古今云亭子院此御屏風此名は川とてんす  
能く代りしものなる木なりたじ中宮ひそくあつて  
よきやぬひをれは流るまづりきつる

後拾遺

後拾遺 秋下は月前落葉とてふ公伝  
即紫くれ面とつらある木はららちやぬ月れ紫とらる  
是は冬とて一秋句新よりて

秋多し一秋猶可尋之  
源氏角総は紅葉か少たる舟れがざりのふ  
一舟 是は冬とて一秋句新よりて

秋多し一秋猶可尋之  
源氏角総は紅葉か少たる舟れがざりのふ  
一舟 是は冬とて一秋句新よりて

秋多し一秋猶可尋之  
源氏角総は紅葉か少たる舟れがざりのふ  
一舟 是は冬とて一秋句新よりて

秋多し一秋猶可尋之  
源氏角総は紅葉か少たる舟れがざりのふ  
一舟 是は冬とて一秋句新よりて

秋多し一秋猶可尋之  
源氏角総は紅葉か少たる舟れがざりのふ  
一舟 是は冬とて一秋句新よりて

秋多し一秋猶可尋之  
源氏角総は紅葉か少たる舟れがざりのふ  
一舟 是は冬とて一秋句新よりて

秋多し一秋猶可尋之  
源氏角総は紅葉か少たる舟れがざりのふ  
一舟 是は冬とて一秋句新よりて

秋多し一秋猶可尋之  
源氏角総は紅葉か少たる舟れがざりのふ  
一舟 是は冬とて一秋句新よりて

秋多し一秋猶可尋之  
源氏角総は紅葉か少たる舟れがざりのふ  
一舟 是は冬とて一秋句新よりて

秋多し一秋猶可尋之  
源氏角総は紅葉か少たる舟れがざりのふ  
一舟 是は冬とて一秋句新よりて

秋多し一秋猶可尋之  
源氏角総は紅葉か少たる舟れがざりのふ  
一舟 是は冬とて一秋句新よりて

秋多し一秋猶可尋之  
源氏角総は紅葉か少たる舟れがざりのふ  
一舟 是は冬とて一秋句新よりて

秋多し一秋猶可尋之  
源氏角総は紅葉か少たる舟れがざりのふ  
一舟 是は冬とて一秋句新よりて

温文集

五十四

新秋もいふこころをみよ

肖柏

山深し松の初音をききし

宗養

ちりていふ山をそと物也又庭なごたあつと山より

か秋後よ色づきふちりてりしと花ハ又紅葉よハ

かりりていふ山より咲て次才よいふく咲ゆらん

奥山よみよ葉もよけり麻のきつ時を秋て

此哥百人一首ハ或抄よいふ山の紅葉ハちりて奥山

乃未れ葉ちりて時が其けをたのてななくといふ

これいあやまらけい哥ハ麻の何れ時なりきといふ

麻のちりていひて時時秋かつりてりし記

事ハ事あをれも其季ハ速速とていふんは記

色葉 是ハ紅葉ハ事也但句秋よいふハ秋可記

紅葉ハいふて色葉といふる哥ハまた万葉集ハ

紅葉ハいふて白落ハ色葉也

思といふもいふて思てすたねんといふハ思ハ

是ハ拾遺物名よこころを抄成よも又西行家集

山よりいふていふていふていふていふて

新撰六帖ハ姫越桃ハいふていふて

胡桃 此外の本ハ實よのいふていふて

霜踏鹿 秋也

殘鴈 秋也歸鴈乃あつて心なく一向不謂越路よあつて

也哥よハ冬りていふ鴈もあつていふ

千鳥 鴈よ結ひていふ秋也新式又千鳥

よ露ハ露ハいふていふていふて

木枯渡鴈 秋ハ未よ来りていふ事也 三智抄

草ハいふていふていふていふて



十月、更衣

一日 掃部寮夏代御装束と撤して  
冬乃よあそむあわの公事根源 年中行

事哥合よ

ゆらぐき露ものもぬ衣も成今もさめず初河ぬ

始氷月

令

射場始

五日 射場席と年中行事、哥合よあり

公事根源云先世月代三日よ左右衛門弓

場代棚とけく天子弓場殿よあそむひく弓を

御覧すしと公以下東帯して是とつ天子

射席とあそぶ弓夫と御座代左右代と兒よそ

らう是群臣とひく弓と初河ふく誠と文

武二つれ道ハとかくくううう故よ今天子も弓場殿

よあそむて武道とあそむる口傳よ射場始

かくハ賭弓とあそぶ賭弓かくハ相撲の節あそぶ

ことと申之明題ニ為程

御垣もけけあつらふうりときもあそぶ始を

年中行事哥合よ

名のもつきあそむる射席と今ハひく

同日 群臣詩と作酒とあそぶ

残菊宴 事重陽よあそぶ 公事根源

木枯 色とびすしきと冬こも秋と云説もあり也

新式抄とくくハ秋冬風木枯たり但こ

乃枯れし川風もよあり野宮哥合よ正通冬物

と難して附口早ハ雲御抄

本枯の枯れ初風吹ぬをなるとあそぶ声とあ

誠よ時雨霜雪とくくハ初風と暮秋初冬

の物なれも宗祇と風乃初風とあそぶ

見渡巻下



程カハハ取ノ衆以下必參内一して雪山と此兒等。  
公事根源 蓋人所衆として廿人あり六位の侍  
可然葦補之と職原  
抄あり禁秘抄よ委

凍

月牙

寒

三月よ

月寒

夜と寒

寒夜

夜寒

寒朝

朝氣寒

今朝寒

小各冬也

炭竈

炭とくろり  
も冬ちり

炭賣

埋火

三月より  
夜分ちり

火桶

擗

夜分也或ハ十一月の景物入本あれも火爐  
の類の次よこよ記之三月より

綿

勿論冬  
也流布

被

字のた露なをいびもひくハ秋に但露乃分  
してハ冬ともとり 立言抄 師説ハ秋なり

久太羅野

野の名也  
ハ雲

枯野

植物よ打越を  
兼へト流布

名草枯

いれも  
冬也

萩

芦落かきよふかありとびとひん  
秋也流布 只りりハ冬なり

枯生薄

かまこころの生ふ生くると云也冬也  
秋也 木才廿二為家哥よ枯生尾花と

凡さゆの富士れすと野わさりもわさきと云  
凡さゆの富士れすと野わさりもわさきと云

賜々枯葛葉

おとしひても冬也かつ落葉  
すうしはうりてー 流布

紅葉散

紅葉散て物を落る冬也新式 是ハ紅葉乃  
ちりて松もれやうの物れ上の色くは散事也

紅葉散初也

紅葉散 是ハ月なと色むらひ  
てもまか冬に長 流布

黄葉流

も冬也  
流布

紅葉進

只紅葉れちりて式  
ころと云し 藻塩草

後撰 罽毘哥

草枕りららひぢらよおとこ心とくくめなるまうや  
まのやうきとみらひられ夕嵐 宵柏

大發句帳よ冬乃部よあり

木葉

おれ葉のさるた月あり  
じとひくも冬と云 流布

一衣

一雨

舟 流布

落葉

本此葉同  
三月よりころ

朽葉

色とあひ  
練只冬

名木枯

これ冬  
たり

柳枯

ちの類  
冬の冬也

凍柳

冬の  
柳也

網代

刺 氷魚

十月比乃景物也 八雲御抄  
鱒音小今案俗云氷魚是

也初學記久下事以對 雖有氷魚霜鶴之文而對其  
義非也白小魚名也似鮎魚長丁二寸者也 順倭

名網代よてころく大和物語

よ氷魚乃使と云事あり

柴漬

積柴於水中一魚得寒入其裏因以薄圍捕取  
之 順和名 日本紀よ柴こりけく少し下をり



采あつても只本枝とし水もこころはらるる其あつて  
まりの魚と積てらるる藻塩草 霖亦作松 爾雅

琴 倭名 但言抄云少しはをふ采面と嫌へ

日本紀に采とくはくゆとあり然ハ抄とも嫌へ  
次十月はちれ物とくく堀河院の御時百首

れ哥なりきり初冬乃心とくゆりきり藤原仲  
實朝臣

いづはらふれたりとみ少しはを以て輪れり冬采もきり

或ハ十一月は景物といつりすく三月よもくくす  
水におりくよと合たり

水におりくよと合たり

温故目録卷第十一

霜月

狩使 寅日 豊御狩 此ハ五節所ハ狩  
ためふわて狩くきりなを成めたりみ使のあり

とられ使のハ也是とくは清御狩ハいり杯五  
節の舞姫のとりハ清御原天皇吉野の宮

ましくて琴と弾くのみハ心の岫より雲より  
天女あまきりて琴れ曲ハ應へてあまの羽衣れ袖

と五度観へてましく  
なまめうのまめさひすもわをたをなを記てをまめさひ

とくくひきりたりや是五節のとりわたりやあまを  
天平五年五月よまさしく内裏へて五節れ舞ハ



よきこととせしむるなりく青指をとりわらふと  
つらき事なり弁の上首とらむ南殿のひさしとせ  
みとせしめて内弁以下座ははく白酒黒酒の盃を  
とりて大歌別當大弁りゆりて舞姫のひさし  
袖をかへてかへりつれにさるる上達部五節所  
多うひく催馬樂ありさるるふり會の歌をひく  
節會の程露臺の舞臺こひんさるるさるる殿  
上人より換なるとりひく節會の座してさ達部  
さるるさるる人さるる東よりさるるさるる  
は事と書詞はさるるさるるさるるさるるさるる  
の節會の座してさ達部さるるさるるさるる  
今日の辰の日れ節會の大掌會の時辰日を修  
紀の節會巳日と主基の節會の節會の節會  
源源おかしきこととせしむるなりく節會の名あり

そふはわさるるさるるさるるさるるさるる  
かさるるさるるさるるさるるさるるさるる  
紀の宴會とすてこととせしむるなりく節會の節會  
句とせしむるさるるさるるさるるさるるさるる  
す年中行事事哥合

豊御稜

非夏冬也神祇也訶林良哉  
云大掌會の節會也

小忌衣

濁源源氏幻乃卷五とらむ此の節會は頭中將  
悉人少將かたはらとせしむるなりく節會の節會  
けりもやすくことあり河海抄云小忌青指山藍指  
也花鳥云十一月中卯日新掌會辰日豊明節  
會は山あわめすれ小忌といふ物と著るなり



終に我ハもやこれ事一知らるる御門へりきせ給ふと  
させ給ふれしをりありてヤこころけりせりひるる  
り程なくしておりりやとくくも位ははせ給ふ  
し寛平元年十一月より臨時祭とせしむる  
其時の使ハ本院乃大臣時平公の右中ねりて  
此とられたりひるるとぬん 久事根源 調樂ハ千比  
宗祇帚木別勘 江次第ニ委

日蔭絲

日蔭、鬘、髪、衣ハ新掌會カごと神事ノ  
時人々著とる裝束也日蔭乃糸くづな  
同神事ノ時くづ事也花鳥餘情ハ新掌會  
豊明節會ハ小忌ときる人日げれづとく物  
冠ハくづ也日蔭草とハさざりけりも  
くづとくづハ日げ草ハわかごら月げり  
づとくづと日本紀第一よりわらわら

日蔭、ハ白こ糸を縮角して左右ハ筋式八十

二筋を冠ノ左右此角ハくづ也

又新式抄ノ日蔭乃絲とし賀茂臨時ノ祭ノ時  
カトクもくもく也天照大神入于天石窟閉般  
而幽居焉余乃六合常闇晝夜不分群神愁  
手足罔措爰天鈿女命以真辟葛爲鬘次  
蘿葛爲手纏歌舞

形と今ハまらる云云

神樂里 非居所 新式大内乃外 庭燎

神幣 杖 篠 弓 劔 鋒 檠

片拵 諸奉 葛 蕁神 以上採 物哥 宮人











三月より氷の流布も冬也 流布 月 非水辺 新式

久也氷の流布も冬也 但氷より流るる 薄氷 氷の流布も冬也

也流布 露氷 水邊 泪 雪霜

冰非水邊 嵐乃水 袖 衣 帶

鴈音水 同前 流布 鏡 水乃鏡 亦水面鏡 鏡 也 藻塩草 亦水面鏡 鏡 也 八雲

以霜雪覆之作絲長一尺織為文綿入水不霰 支那真嶠 山有氷 嶠

是也下學 氷の流布も冬也 宗祇の流 氷柱 水邊也 垂氷

八流の系長く氷をえんく 氷柱 水邊也 垂氷

凍蝶 冬也 無言抄 和漢篇より

水鳥 三月 浮寝鳥 水鳥 浮鳥 無言抄より嫌詞

とあれも今ハこれナク 新撰六帖 水鳥の哥云 信實朝臣

新續古今第十七 水鳥と道善法師

定りあるを流るる氷をえんく 氷をえんく やすくぬらひたり

千鳥

三月はわつる鳥也  
ひて冬也 新式抄

鶯

一ノ香 香れありは似て哥枕よ

鴨

舟 舟れありは似也 八雲云 萬葉第十六よ

又鳥と舟ともんる 哥枕よ藤原親佐  
又鳥と舟ともんる 哥枕よ藤原親佐  
又鳥と舟ともんる 哥枕よ藤原親佐  
又鳥と舟ともんる 哥枕よ藤原親佐

又鳥と舟ともんる 哥枕よ藤原親佐  
又鳥と舟ともんる 哥枕よ藤原親佐  
又鳥と舟ともんる 哥枕よ藤原親佐  
又鳥と舟ともんる 哥枕よ藤原親佐

又鳥と舟ともんる 哥枕よ藤原親佐  
又鳥と舟ともんる 哥枕よ藤原親佐  
又鳥と舟ともんる 哥枕よ藤原親佐  
又鳥と舟ともんる 哥枕よ藤原親佐

鶺鴒

列鳥小鴨の事也 鶺鴒の事也  
也 巴説 冬也のうは社といつり

秋沙

河はわつる鳥也 雲とゆふもいり 又本哥よはわつる  
河はわつる鳥也 雲とゆふもいり 又本哥よはわつる

鶺鴒

一名沈鳥 貌似鴨而小 昔上有文 順修名 万鴨  
書惠慶法師家集よ

風俗上野哥 曰

都鳥

水鳥の新式 冬と云云 流布一説  
雑と云ふ 其義非也 冬と云

鷹

三月 著 鷹の事 鷹の事 鷹の事 鷹の事

温政後上



鳥落草 草取鷹鳥  
鳥落草 草取鷹鳥

草を草よといおとすてを成らすすてもの為す草  
とらると云也又草とらるともよみり 藻塩草

追草とて草をくらしとらると草とらると也又草乃  
とよめたやとらるとも草とらると也 百首注 此

のうりれ詞悉冬也四季よじりしことものく九卷詞  
よけさて可知草共八百千丈此帝よも

うたのうら四季よ大綱わらむものなり  
燧鳥 寒夜よ鷹鳥と捕て生あくる足と  
あつて明もけをみし三智抄

*[Faint bleed-through text from the reverse side]*



